

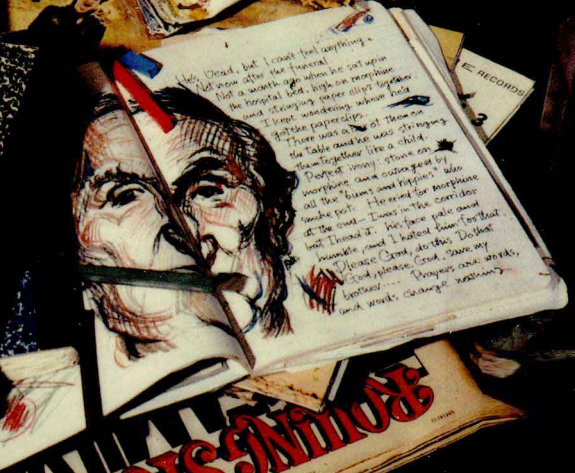
ポックス



急いで歩け、ゆるく走れ

バーバラ・ワースバ

吉野美恵子訳



He's Dead, but I can't feel anything -
 Not when after the funeral
 that a month ago when he got up
 the hospital bed, high on morphine
 and screaming noise about his
 I kept wondering when he'd
 get the paperwork.
 There was a lot of them on
 the table and he was straggling
 them together like a child.
 "Protect my" Stone on
 morphine can a cut a part by
 all the "bump and rippin'" also
 make part. He cried for morphine
 at the end - I was in the corridor
 but I heard it. His face pale and
 I made and I heard him - that
 "Please God, do this. Do that.
 God please. God. Save my
 breast - - - Prayers and words,
 and words change nothing.

RECORDS

SPORTING STYLING

著者について

ノースバ

作家。子供時代から芝居に出
て卒業したあと、舞台・テ
レ。その後作家生活にはい
った。その小説を書いている。
のための小説を書いている。
にクに住み、「ニューヨーク・
いたちの本の批評を担当して

の・みえこ

生まれ。日本女子大学英文

ス『アガサ・クリスチの
社』、B・ランドール『ファ
書房』、K・アルネブルム
川書店) ほか。

ダウンタウン・ブックス

急いで歩け、ゆっくり走れ

一九八〇年一月二十五日発行

著者 バーバラ・ワースバ

訳者 吉野美恵子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

△検印廃止▽落丁・乱丁本はお取替えいたしません。

急いで歩け、 ゆっくり走れ

バーバラ・ワースバ 吉野美恵子訳

カウンタウン・ブックス



晶文社

Barbara Wersba :
RUN SOFTLY, GO FAST
Original Copyright © 1970
by Barbara Wersba
Japanese Copyright © 1980
by Shobun-sha Publisher, Tokyo.
Japanese translation rights arranged
with Barbara Wersba
c/o A. M. Heath & Company, Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

急いで歩け、 ゆっくり走れ

バーバラ・ワースバ 吉野美恵子訳

ダウンタウン・ブックス



晶文社

Barbara Wersba :
RUN SOFTLY, GO FAST
Original Copyright © 1970
by Barbara Wersba
Japanese Copyright © 1980
by Shobun-sha Publisher, Tokyo.
Japanese translation rights arranged
with Barbara Wersba
c/o A. M. Heath & Company, Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

急いで歩け、ゆっくり走れ

ブックデザイン
平野甲賀

彼が死んだ。だが、ぼくの胸にはなんの感情もわいてこない。葬式をすませたいまでさえも。一カ月前、彼が病院のベッドに半身を起こし、モルヒネでいい気分になって、書類とじのクリップを数珠つなぎにしていたときもそうだった。どこからクリップなんか持ちこんだのだろうと、それだけをぼくは考えていたものだ。テーブルにクリップの箱が置いてあり、彼は子供みたいに一つ一つクリップをつなぎあわせていた。なんと皮肉なことだろう——自分自身モルヒネにうっとり痺れながら、マリファナを吸う「ろくでなしやヒッピーども」をくそみそにこきおろすとは。彼は、最後には泣き叫んでモルヒネを求めた——ぼくは廊下に出たのだが、声は聞こえた。その声は母とベン叔父の耳にもとどいた。ベンは青ざめた顔に敬虔な表情をたたえて祈りつづけ、ぼくはそんなベンに激しい反発を感じていた。主よ、どうかこうしてください。主よ、どうかああしてください。主よ、兄をお救いください。祈りは言葉にすぎないし、言葉は何も変えやしない。彼はいま、ブルックリンで永遠の眠りについている——あのみるからに頑固な顔も、葉巻で黄色く染まった太い指

も、短い脚もともに。ぼくが小さな子供だったころ、あのころはなぜ彼の姿までがまるで違って見えたのだろうか……。今夜は頭がぼうつとして、考えがまとまらない。部屋のなかはもうすっかり暗くなり、描きかけのマガীর肖像画が、薄暗がりのなかで何か異様に目に映る。母はこれでもうぼくがリヴァーサイド・ドライブに戻ってくると、そして何事もありはしなかったかのように、もとどおり自分の部屋で暮らしはじめるものと思っている。母も、ペンも自分がゲームをやっていることとどうして気づかないのだろうか？ ペンは芸術を愛し、学もあるけれど、彼にしたところでやはりゲームをやっていることに変わりはないのだ。ペンのはただ、金と安全と所有のゲームではないというだけで。ペンの秘蔵する富は精神的なものなのだ。人間誰しも、ためこめるものなど一つもないことがわからないのだろうか？ 生まれるとき、死ぬときに持ってゆけるものはただ一つしかない。それは自分自身だ。

葬式はまったくの茶番だった。あのラビはうちの父と顔見知りでさえなかった。寄席の芸人みたいに、雇われて一席つとめたまでのこと。司祭とかラビとかいった手合いはみんなまさにそうではない——^{かひ}黴の生えたようなジョークをとばす寄席芸人だ。葬儀場は十脚そこそこの椅子と聖書台があるきりで、うそざむい空気に浸されていた。花は熱気にしおれていた。そして、ぼくらが靈柩車のところへと式場を出るが早いから、連中はそれとばかりに次の葬式の用意にとりかかったものだ。流れ作業で処理されてゆく死。小さかったころはどうして彼のことであれほど違って見えたのだらう？ 彼が病院のベッドに横たわり、モルヒネで気分上々になって、会社のこと、仕事のことをとめどなくしゃべりちらしているのを見ていたときだ、不意に五歳のころの思い出がよみがえっ

てきたのは。キャツキル山中のあのバンガロー……そのことは考えたくない。彼はぼくのことを、女の子に食わせてもらっているろくでなしとまで言ったのだ。絵描きなど仕事のうちにはいらぬと言わんばかりに。ろくでなしにヒッピー、ヒッピーにろくでなし——歌が一曲つくれそうだよ。「せめて婚約ぐらいしたらどうなんだ」と、しょっちゅう彼は言ったものだ。「わたしがおまえをこんなふうに育てたと思ってるのか？ イースト・ヴィレッジなんぞで、社会の落伍者も同然の暮らしをしておって。若い女が若い男と、婚約もせずに平気で同棲するとは、いったいどういう家庭の娘なんだ？」どこまでも粗野な男だった、彼は——金にものをいわせてシユルマンの会社をのとり、三百ドルのスーツを着用するようになってからも、その本質は変わらなかった。フロリダに別荘を買い、パーティのたびに執事を雇う御身分になってからも。そうした「上流」気取りに、ぼくはいつもおぞけをふるったものだった。でも、キャツキルの夏の日々は……。

マギーが早く帰ってくるといいたが。愛しい。ペンが聞いたら目をまわすだろう——いまさっき葬式をすませたばかりなのだから。だが、セックスは人生だ、そして今夜のぼくは人生を切望している。彼のじゃない、ぼく自身の人生をだ。ぼくの考え、ぼくの言葉、自在に描けるぼくの手。もしも彼が自分の思いどおりにことを進めていたら、いまごろぼくは大学の三年生として新学期を迎えていたはず……冗談じゃないよ、まったく。そして卒業、お次は就職。それから結婚し、大酒をくらい、テレビを見る。あげくのはてに、物質的に満ち足りた生活を築きあげること、そうした生活につきものの、なんともやりきれない虚しさを埋めようとするのだ。昔から彼は、月に一回は車にワックスをかけさせたものだが、それが理由でぼくは一度もその車を走らせてみなかつ

た。かき傷ひとつでもつけようものなら、彼はきつと自制心もなくしてしまったにちがいない。「おまえという奴はどうしてもつと注意深くやれないんだ？ 六千ドルもする車を気がいいたいにぶつとぼす奴があるか」ほくら家族の誰を愛する以上に、その車を愛していたんだ。それこそ正気の沙汰じゃない。人が死んで、あとに残るものといえ、大量のがらくたばかりだ。金のカフス・リンク、テレビに、ゴルフのクラブ。葬式の席にも、ローエンスタイン夫婦を除き、ほんとうの友人は一人も見受けられなかった。奇妙なことだけれど、それだけは、ほくも胸が痛んだ。

正直にいこう。彼はいやな奴だったし、おまえは彼を憎んでいたのだ。

墓地を出たあと、昼食を一緒にということになって、リヴァーサイド・ドライブに戻った——ほくに母にベンにローエンスタイン夫婦と、みんなそろって何か祝い事でもはじまるような感じだった。案外それがほんとのところだったんじゃないだろうか。そのうちに思い出話がはじまった——レオはどんなに立派な人だったか、どれほどみんなに敬愛されていたか。なんだか御伽噺おとぎばなしを聞いているようだった。ルス・ローエンスタインがほくを見て、首を振り振り言った。「まあまあ、その長い髪の毛、デイヴィー！」でも、彼女はあれで人はそう悪くもないんだ。少なくとも葬式に来てくれたのだし……子供のころだってほくは髪を長く伸ばしていた。とてもかわいらしくて、よく女の子とまちがえられたものだ——それが彼には気にくわなかったのだが。彼にとっては男らしさがすべてを決し、おかげで、キャツキルで過ごしたころという、いまもほくの記憶に多少とも消え残っているのはいつ終わるとも知れないボール遊びの思い出ぐらいのものだ。ベンがポーチで本を読みふけているとき、父はいつも庭で、ほくを相手にキャッチボールをやっていた。それにしても

不思議なのだが、あのころのぼくの目に彼はなんと違って見えたことだろう。

二、三年前おまえはリックに何と言ったか忘れちゃいまいな。「おやじが死なないかぎり、ぼくは自由になれないんだ」ならば、これでおまえの望みはかなえられたわけだ。ただどういうものか、彼の死んだことがまだピンとこない——いまでもフロリダで、プールの横に寝そべっているような気がしてならない。何かをいくらで手に入れたというようなことを彼は好んで吹聴し、それで取引先のバイヤーたちを感心させようとしたものだが、葬式に顔を見せたバイヤーが一人いるでもなかった。ほんとうに、これには彼も心を傷つけられたにちがいない——もっとも、彼のことから、まちがっても失意をおもてに出したりはしないだろうけど。「あんな低級な連中に何を期待できるというのだ？」ぐらいのことは言いそうだ。「知ったかぶりの馬鹿者どもめ。ビジネスの世界で出会うのはそういう輩ばかりだよ。なに、友だちはどこかほかで見つけりゃいいのさ」(だがレオ、あんたには友だちなんかいやしなかったんだ。あんたは誰にたいしても、相手の足をすくうことしか考えない男だったから)

あの夏の日々のことを書いて何がいけないのか？ マギーが帰宅するまで、ずっとこうして書いていよう。夜の闇が迫ってこないように……。渚はどんなだったろう？ まっしろな小石。それをよく口に含んでみたものだ。そして、どこまでも深く深いエメラルド色の湖面。大気は澄みわたたり、対岸の人声まで聞きとれた。一度ぼくは向こう岸で「ハロルド、ほんとにおまえには手を焼くよ」と言う声を聞いて、誰かが火あぶりにされているんだと思ったことだった。夜になると、湖面に映る月が机に置かれた銀貨のように見え、ぼくはそれをすくいとって、壘に入れておきたいと思った。

けれども、いざ手を触れると、いつもそれは消え失せてしまうのだった。そのことを彼に話したら、彼は言った。「たいした夢想家が生まれたもんだな、わが家には。わからないのかい、デイヴィー、お月さまには手はとどかないんだよ」それはずっとあとまでぼくの記憶に残った——月に手はとどかないのかどうか。当時ぼくは五歳ぐらいだったろう、はじめての夏のことだった……。バンガローには黴臭かびいにおいがこもっていたけれど、そよ風が吹きわたると、松葉とミルクのような香りがあたり一面に広がった。どこか近くに農場があったのかも知れない。いまパットと、はつきり思い出した。松林のなかを小道が湖まで走っていたこと、ぼくが浅瀬でぼちゃぼちゃやっているあいだ、父と母は毛布を広げてカード・ゲームをやっていたこと。いつもポータブル・ラジオがつけっぱなしにしてあったが、ベンは孤島に一人いるかのように本を読みふけていた。ぼくは赤いおもちゃのボートを持っていた。いや、青だったな。あるときそれが流れていってしまった、渚しづづたいに追いかけていったところ、ボートはカッツの船着場に流れ着いていた。そして、ぼくは見た……カッツの家の兄弟が小鳥を水につけていたのだ。「こいつ怪我をしてるんだよ」とカッツの男の子たちは言った。「だから、こうやって楽にしてやってるんだ」ぼくにはでも、嘘をついてるんだとわかった。溺れ死にさせて喜んでるんだとわかって、それからぼくは泣きだした。

実際にこのとおりだったのか、それともぼくは、欠けているところを補って、都合よく辻褄つじつを合わせようとしているだけなのか？ いや、そうじゃない、古いスナップ写真のように何もかもがくつきり目に浮かんでくる。縁無眼鏡をかけたベン、デニムのショート・パンツ姿の母、罐かんビールを飲んでる父。ぼく自身の姿まで見える——やせっぼちで、黒っぼい大きな目をして。ひよわな身

体つきだったけれど、父はそれを認めるくらいならば死んだほうがいいと思っていたらしい。ぼくのことをスポーツマン・タイプと独りぎめして、ぼくがどんなにすばらしい体格をしているか、しょっちゅうベンに話していたものだ。嘘もどうかすれば真実になるとでもいうように。でも、何かいやなことが起こると、たとえば小鳥が溺れ死にさせられたりすると、ぼくはいつも必ず彼のものとへとんでいった。いつもぼくを抱きしめてくれる腕のなかへ。どれほど彼が頼もしく、どれほど力強く思われたことか、ほんとうにそれはもう驚くばかりだ。彼の胸のごわごわの毛、彼の香りがぼくは好きだった——シェーヴィング・ローションと葉巻の香り。そして、彼が学校へやってくる、誰の父親よりもいっとうハンサムに見えたので、いつもぼくは鼻を高くしたものだ。小学校でぼくは絵を描いたけれど、そうした絵に母が登場したことはない。大きな頭に胴体と手足を直線で描いた、ぼくと父の姿があるだけ。その絵を彼は全部とっておいた。いままで何がいやだったといっても、彼が死んだ翌日、母と二人で遺品の整理をしていて、押入れにその絵を見つけたときほどいやな思いを味わったことはない……。マギーが帰ってくるまで書きつづけて、それでやめにしよう。このことについてはどんなわだかまりも残しておきたくない。ぼくは解放されたい。リックがぼくによく言ったのもそのことだ——おやじさんのことはいいかげんふっきつちまえよ、と。だが、ぼくはできなかった、家をとびだしたときでさえも。自分の価値を証明してみせようとせずにはいられず、それでいながらやることなすことがいちいち的はずれていた。いつまでたってもぼくはぐうたら者、落伍者、ヒッピーでしかなかった——彼の得意な言葉。人生というものが彼にはまるでわかっていなかったのだ。ユダヤ人に生まれながら、プロテスタントの倫理をうのみにし、それに

ただ盲目的に従って一生を終えた男には。

湖畔で迎えた最初の夏……水面に枝先を濡らしている木々、対岸から漂い流れてくる声。浅瀬で、時の経つのも忘れて遊びふけた。水は澄んでいたが、遠い湖面は次第に暗い色調を深め、ぼくの想像では、その深い水底には湖を静めるも荒れ騒がすも思いのままにできる怪物が眠っているのだ。松葉とミルクの香り、暖かい太陽、ラジオにあわせて歌をくちずさんでいる母の声。渚でのランチ、それからみんなでパンガローに帰り、ぼくは「クマさん」をかかえて昼寝する。おねしよをする、クマさんがやったんだよ、といつもそう説明したものだ。恥ずべき行為——おねしよをすること、パパとママの部屋にノックしないではいること、押入れに隠れること。当時のぼくが神について多くを知っていたはずもないのだが、ベッドにはいつから、ぼくをよい子にしてくださいと誰にもなく祈ったことを覚えている。よい子になれば愛してもらえたからだ……。 (その日ぼくは、あの小鳥どうなったろうと思つて、もう一度見にいふた。行つてみると、カッツの渚にそれは濡れそぼれ、ぐったりとなつて打ち棄てられていた。手を触れてみて、その感触——片方の翼がぐらぐらしていた——にゾツとしたけれど、そのままうちやうちやうちおく気にもなれなかつた。で、彼のところへ持つていった。死んじやつたの? とぼくはきいた。「いいや、デイヴィー。この鳥はね、天国に行ったんだよ」そのときぼくの目にふつと、死んでもなお万物が生きていられるところ、天国へと小鳥が舞いあがっていくのが見え、ぼくは自分もそこへ行きたいと思つた)

妙なこともあるものだ。はじめてLSDをやったとき、ぼくは父の実像を見定めたいと思つただ——けれども、ぼくが見抜いた唯一の真実といえば、マーティ・ブルックスは蛇のような奴だ

ということではしかなかった。それまではずっと友人だった、だが、みんなでLSDをやったとき、ぼくの内マティーは、まっくらな舌を閃かす赤い蛇に姿を化した。そしてぼくはマティーがぼくの人生を毒していることに——事実そうだったんだ、あいつは——気づき、彼を殺してやりたと思った。だが二度目は……なだれおちる光がガラスさながらに見え、一つの色の奥に別の色が、その奥にまた別の色が見てとれた。ほかの誰の目にも見えない、果てしなく連なるスペクトル目もあやに、さんぜんと輝くガラスの滝。さまざま色がぼくの手からたちのぼりはじめる……えもいわれぬ美しさ——芸術の真髓を成す美がぼくの内部にあること、美は手のとどかぬものではないことをそれは語りかけていた……。夕食前のあのキャッチボール。彼を喜ばせたい気持は大いにあったのだが、いっしょうけんめいやればやるほどうまくいかなくなってしまうのだった。そのところをなぜ彼はわかってくれなかったのか？ 彼はそのゲームがワールド・シリーズか何かのようにふるまった、構えたミットをばんばんたたき、ぼくを叱咤激励して。「さあ、どうした！ もつとうまくやれるはずだぞ。ボールから目をはなすな。きよろきよろしないで、ボールを見るんだ、ボールを。オーケー、ちょっと投げてみる。いや、アンダーハンドじゃなくて。腕をこう持っていないんだ。どうだい、わけないだろう？」

ミットをばんばんやりながら、笑いながら、彼はぼくがエースに、たくましい少年に変身をとげるのを待っていた。「男の子はああでなくちゃ、ベン。見てみろよ、あの背中、あの肩」これではたまったものじゃない、はじめる前からぼくは萎縮してしまふ——そしてある日、キャッチボールの最中に、クマさんが欲しいとぼくはただをこねだした。どこに失せたのか、ぼくのクマは朝か